



TITLE:

# 『サン・ヒアン・カマハーヤーニカン(聖大乘論)』にみる古ジャワの密教

AUTHOR(S):

石井, 和子

---

CITATION:

石井, 和子. 『サン・ヒアン・カマハーヤーニカン(聖大乘論)』にみる古ジャワの密教. 東南アジア研究 1989, 27(1): 55-70

ISSUE DATE:

1989-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/56356>

RIGHT:

# 『サン・ヒアン・カマハーヤーニカン (聖大乘論)』 にみる古ジャワの密教

石 井 和 子\*

## Old Javanese Esoteric Buddhism as Seen in the *Sang Hyang Kamahāyānikan*

Kazuko ISHII\*

In 1910, J. Kats published the *Sang Hyang Kamahāyānikan* (SHK), including the text of the *Sang Hyang Kamahāyānan Mantranaya* (SHKM). In 1915, a Japanese scholar, Unrai Ogiwara, pointed out several parallel verses in the SHKM and the Chinese version of the *Mahāvairocana-sūtra*.

In 1950, Shinten (Shiro) Sakai, also Japanese, identified verses 26 to 42 of the SHKM with verses in the Chinese and Tibetan translations of the *Adhyardhaśatikāprajñāpāramitā-sūtra*. I found the SHKM verses 10 & 11 equivalent to verses in the *Sarvadurgatipariśodhana-tantra*, and identified verses 12 & 13 with phonetic transliteration in the Chinese translation of *Tattvasamgraha*. SHKM verse 13 was also found to be equivalent to verses in the *Sarvadurgatipariśodhana-tantra* and the *Sarvavajrodaya*; and verses 14 & 15 to verses in the *Kriyāsamgrahapañjikā* and verse 19 in the *Sarvavajrodaya*.

According to Advayavajra of the late 10th century, Mahāyāna Buddhism was divided into two sects, Pāramitānaya and Mantranaya. Mantranaya was the esoteric form of Mahāyāna, which was, the later period, called Mantrayāna or vajrayāna. I believe that the SHKM was used as a manual for initiating new disciples into the Mantranaya sect in Old Java.

After commenting on Mantranaya and giving a short history of Mantranaya Buddhism in Old Java, this paper discusses the SHK, focussing on the attainment of Buddhahood by means of breath control with the germ-syllable 'aṃ-ah'; and it describes the Javanese Mantranaya Mahāyāna pantheon, in which the Supreme Being, symbolized by Sang Hyang Diwarūpa, assumes the body of the Bhaṭāra Hyang Buddha, which then manifests itself as Bhaṭāra Ratnatraya (Śākyamuni, Lokeśwara and Bajrapāṇi) and Bhaṭāra Pañca Tathāgata.

### は じ め に

古ジャワの密教教理書と言うべき『サン・ヒアン・カマハーヤーニカン (*Sang Hyang Kamahāyānikan*, 聖大乘論)』は、『サン・ヒ

アン・カマハーヤーナン・マントラナヤ (*Sang Hyang Kamahāyānan Mantranaya*, 聖真言道大乘)』と共に、1910年オランダの J. Kats により蘭訳で初めて世界に紹介された。1913年には J. S. Speyer が『聖真言道大乘』(以下 SHKM と略す) の梵文偈の校訂および独語訳を行っており [Speyer 1913], その後1935年には K. Wulff によりデンマーク語に翻訳されている [Wulff 1935]。

\* 東京外国語大学 インドネシア・マレーシア語科; Department of Indonesian-Malaysian Studies, Tokyo University of Foreign Studies, 4-5-21 Nishigahara, Kita-ku, Tokyo 114, Japan

SHKM は梵文の偈を古ジャワ語で訳すというかたちをとっているが、この梵文の偈が日本をはじめ世界の仏教学者の注目を集めたのは、この偈の一部が漢訳、チベット語訳のみで未だに梵文テキストの見付かっていない『大日経』の断片であったからである。

インドネシアの仏教の歴史については岩本裕によりすでに詳しい解説がなされ [岩本 1973: 259-309], SHKM, 『聖大乘論』 (以下 SHK と略す) もその中で紹介されている。しかし、古ジャワの密教そのものについての研究は、わが国ではほとんど手掛けられていない。<sup>1)</sup>

本稿はすでに筆者が行なった上記両テキストの和訳<sup>2)</sup>に基づいた分析である。その内容は、I. SHKM のキーワードである「マントラナヤ (真言道)」についての筆者の解釈、II. 真言道大乘、即ち「密教」のジャワへの伝播、III. SHKM の構成から推定されるジャワ密教の灌頂次第、IV. SHK テキストにみるジャワ密教の成就法、V. ジャワ密教の神学、である。

## I 真言道 (Mantranaya) について

いわゆる「密教」をいう時、外国の学者達は「金剛乗」とか「真言乗」という語を用いている。しかし、梵語文献、もしくは梵文より翻訳されたチベット文献の古いものには「真言乗」や「金剛乗」の語は存在しないと

言われる。8世紀のブッダグヒヤの『大日経広釈』の冒頭部分には、二種の行、即ち「波羅蜜の門」と「真言の門」より入り行ずるものがあると説かれている。また10世紀後半のアドヴァヤ・ヴァジュラの書では、大乘が波羅蜜道 (Pāramitānaya) と真言道 (Mantranaya) とに二分されると述べられているが、「真言乗」の語の使用は11世紀以後といわれる [松長 1980: 23-25]。

それではジャワではどのようなであろうか。SHKM の梵文の1偈、「来れ仏子よ。汝のために正しく大乘の真言道の儀軌を説かん。汝は大道<sup>3)</sup>を受くるにふさわしき者なり」の釈中で、ジャワの阿闍梨は「Sang Hyang Mantranaya sira Mahāyāna mahāmārga ngaranira. (聖なる真言道<sup>4)</sup>は大乘の偉大な道なのです)」と言っている。大乘には六波羅蜜の修行を主とする波羅蜜道もあるという理解の上で「真言道 (Mantranaya)」を偉大な道、大乘の幹線とも言うべきものだと考えていたと思われる。

それではここで SHKM 中の梵文偈とその古ジャワ語訳<sup>5)</sup>を一つみとめることにする。

〈これは大乘の大いなる繁栄をもたらす最勝の道なり。これにより汝等は未来の如来となろう。〉<sup>6)</sup>

1) 筆者は SHK の和訳の一部紹介と考察を行なった [石井 1987]。

2) 和訳は J. Kats 本 [Kats 1910] を底本とし、Bali Project (Hooykaas Collection) の LOr 12923, 13200, 13976, 14728, 14749, 14806, 15003 の各写本は補助的に使用した。「LOr」は、Leiden University Library, Oriental Department の略号。SHKM の和訳は [岩本 1977; 石井 1988a], また SHK の全和訳は [石井 1988b] を参照。

3) この部分の『大日経』の漢訳は「大乘」となっている。「仏子此大乘。真言行道法。我今正開演。為彼大乘器」[大正新脩大藏經 (以下、大正蔵と略す) 18巻4ページ (18: 4)]。

4) 梵語「naya」は我が国においては普通「理趣」と訳されるが、『大日経疏』[大正蔵 39: 610]において「梵音娜耶。即是乘義道義」と説かれていることや古ジャワ語訳において、「方法」という意味合いで「mārga (道)」が当てられているので「mantranaya」は「真言道」とした。

5) 釈中の梵文偈は訳文の流れを良くするため省略。

6) 漢訳は「此殊勝願道。大心摩訶衍。汝今能志求。當成就如来」[大正蔵 18: 6]。「大心摩訶衍」

聖なる大乘の偉大な道、これをあなたに示してあげましょう。これは天上の至福への正しい道であり、大いなる繁栄を与えてくれるものです。大いなる繁栄とは、外面的・内面的幸福であり、（外面的幸福には）名声、富、階級、王位、世界の支配といったものがあります。（内面的幸福）とは世間を超えた幸福であり、苦を伴わないものです。

（そして）老い、病いや死に遭遇しないこと、それは無上で、最上の正等覚者の幸福、解脱の幸福なのです。外面的・内面的幸福、つまりそれが大いなる繁栄であり、修習する大乘の偉大な道で満たされることができるのです。それゆえ、この大乘の教えに堅く従う時には、あなたは必ず仏陀の境地を得ることができるのです。あなたが解脱を証得した時には二種の資糧、つまり智と福の資糧を得ることになり、一切世間の尊敬をもそれにより得るでしょう (b10-b11)。

文中の「聖なる大乘の偉大な道」とは「真言道」即ち「密教」を指しており、顕教の大乘ではないと考える。福（徳）の資糧とは、布施などの善行を行い功德を積むことであり、智の資糧は、智慧を磨いて自己の悟りを完成するための行である。顕教では菩薩はこの行を無量劫、即ち無限に続けなければならない。しかし、テキストは解脱を証得したら福智の資糧が得られる、つまり二種の資糧の無量劫の積集を前提としなくとも仏陀の境地が得られるというのである。密教が瑜伽などの行法で大宇宙と小宇宙との合一、即ち「成

仏」をめざすものであるからこれは頷けよう。弘法大師空海は『大日経開題』の中で「わづかにこの門に入れば、すなわち三大僧祇を一念の阿字に超え、無量の福智を三密の金剛に具せん」「無量の福智は求めざるに自ら備はり」「真言門の菩薩の行を行ずる諸々の菩薩は、無量、無量劫に積集し修行するところの無量の功德智慧みなことごとく成就す」と述べている [宮坂 1983: 66, 88, 67]。

一方、灌頂後の弟子に対して、SHKM 18 偈の古ジャワ語釈は「あなたは今や仏子、つまり仏陀世尊の子なのです。それゆえ今すぐにも善行にとりかかり、他人の利益を考えなさい」と説く。つまり真言や瑜伽などの行法で先ず「成仏」を体得し、その後「利他行」というのが「真言道」ということになる。

SHKM でジャワの阿闍梨のいう「Mantranaya Mahāyāna」或いは「Kamahāyānan Mantranaya」、即ち「真言道大乘」は、いわゆる「密教」なのである。しかし、ジャワの文献においては明らかに「真言道大乘」であっても、「大乘 (Mahāyāna)」の語のみが使用されている。その一例が本稿で考察する SHK、即ち『聖大乘論』である。

## II 密教のジャワへの伝播

7 世紀の義浄の『大唐西域求法高僧伝』によれば、訶陵（ジャワ）には高僧若那跋陀羅（ジュニャーナパドラ）がおり、中国僧会寧はこの僧の協力で小乗仏教の經典の漢訳を行ったという [大正蔵 51: 4]。義浄はまた『南海寄帰内法伝』の中で訶陵州を含めた南海の諸州は多くは小乗であり、大乘は末羅遊に少しと記している。彼によれば大乘はその時代「中観」と「瑜伽」の二種であり、瑜伽は「唯識」と述べている [大正蔵 54: 205]。

金剛智は718年インドから中国に向かう途中シュリーヴィジャヤに5カ月滞在してお

ㄴの部分、SHKM 及び『大日経疏』の音写では「mahāyānamahodayaḥ」。尚、古ジャワ語釈中の「あなたが〜得るでしょう」に相当する梵文は次の偈の前半部分、「自在者で大幸運者、一切世界の制多なり」にあたる。漢訳は「自然智大龍。世間敬如塔」。

り、720年洛陽に到着するまで異国で苦労したといわれる。この間、スマトラのみならずジャワを訪れていた可能性が大きい。というのも『貞元新定釈教目録』巻15〔大正蔵 55: 881〕に不空三蔵が閼婆国で金剛智とめぐり会い弟子になったとの記述があるからである。

中部ジャワで一番古いとされる732年の「チャンガル (Canggal) 碑文」<sup>7)</sup> はサンジャヤ (Sanjaya) 王によるリングの建立を述べ、シヴァ、ブラフマー、ヴィシュヌ神を讃えている。サンジャヤ王はシヴァ神の信奉者であった。ジャワにおいて「仏教」の記述ができるのは、778年のカラサン (Kalasan) 碑文<sup>8)</sup> である。この碑文は、シャイレンドラ王家の王師達が、時の王であるパナンカラナ (Panamkarana) に女尊多羅 (Tārā) を祀る寺院の建立を進言し、その聖所と大乘の戒律をまもる修行僧のための僧院がカーラサの地に建立されたことを伝えている。多羅は SHK にも仏眼 (Locanā)、摩摩枳 (Māmaki)、白衣 (Paṇḍarawāshini) と共に記述がある女尊であるが、インド・チベット密教では特に重要な地位を占めていた。4年後の782年の「クルラック (Kēlurak) 碑文」は、シャイレンドラのインドラ王についての記述や、クマーラゴーシャというガウディ (ベンガル) から来た尊師により文殊師利像が奉獻されたことを伝えている。また「この高貴な持金剛 (vajradhṛk)<sup>9)</sup> は、ブラフマー神であり、ヴィシュヌ神であり、マヘーシュヴァラ神であり、一切の神々を含んだものである」との一節もみられる。この碑文中の文殊は「持金剛」の

文殊、<sup>10)</sup> 即ち「密教」の文殊師利と推定される。密教の文殊は一切如来の般若波羅蜜の智慧を象徴すると言われ〔梅尾 1982: 95〕、密教経典『聖文殊真実名義経』では法身とされている。ヒンドゥー教の三神も「仏智」の「顕れ」であると考えられていたといえよう。<sup>11)</sup> 9世紀前半には完成したとみられるボロブドゥール (Borobudur) 寺院の方壇には密教の金剛界曼荼羅の五仏、即ち東一阿闍、西一阿弥陀、南一宝生、北一不空成就、それに四方向の毘盧遮那仏がみられる。その上の円壇の転法輪印の72体の如来像は、釈迦 (牟尼) 仏といわれているが、筆者は『(初会) 金剛頂経』(堀内本)〔堀内 1983: 9-10〕〔大正蔵 18: 207〕において「虚空界全体に常住、遍満し、一切の如来たちの心臓に住していた」<sup>12)</sup> と説かれている「大毘盧遮那 (Mahāvairocana)」即ち法身毘盧遮那であると考えている。

ボロブドゥール寺院の近くにはこれより古いとされるムンドゥット (Mendut) 寺院がある。この寺院の外壁には八大菩薩の浮彫りがあり、また堂内には転法輪印の如来を中尊とする三尊が現存している。この中尊は『大日経』の胎藏界曼荼羅の毘盧遮那に比定され、これらの諸尊の配置は胎藏界曼荼羅とみなされている〔Singhal 1985: 709-714〕。以上のことから密教の『金剛頂経』と『大日経』の教義が8世紀から9世紀にかけてジャワに入ったことはほぼ間違いないであろう。

ボロブドゥール寺院完成後そう遅くない時

- 7) 南インドのパラヴァ文字で書かれた梵文の碑文〔Poerbatjaraka 1951〕。
- 8) カラサン及びクルラック碑文〔Sarkar 1971〕は梵文、前ナーガリー文字使用。
- 9) vajra (ヴァジュラ) は金剛杵のことである。金剛頂系の密教では「真理」を表す〔佐和 1975: 231〕。

10) 文殊菩薩は住無戲論執金剛の異名をもつ。

11) ヒンドゥー教の三神に関する SHK の記述は第5章を参照されたい。

12) 格子の透しの入った72のストゥーパが、「一切の如来たちの心臓」にあたると考える。ストゥーパの中に安置されている仏陀像が大毘盧遮那である。実際に格子の外からはその姿がよく見えないのは、衆生に未開頭の「法身」ゆえなのである。

期であると考えられる860年の「ゲダガン (Gedangan) 碑文」<sup>13)</sup> [Sarkar 1971] によれば、時の王ローカパーラ (Lokapāla)<sup>14)</sup> は、ボーディミンバ (Boddhimimba) の尊師のために免税地の特権を与えており、毘盧遮那そのものというべき尊師は昼夜、瑜伽、供養、三摩地、念誦に励み、国王のため敵の降伏を祈祷したという。この尊師には子供が二人おり、ボーディミンバの免税地はこの二人が継ぐとも述べている。この尊師は出家をしていない、つまり妻帯者であったと考えられる。これは北インドやネパールでヒンドゥー教のカースト制度との融合から生まれたといわれる、妻帯し僧祿は世襲という仏教司祭、即ち金剛阿闍梨 [ウェーバー 1983: 362, 387] を思い起こさせる。彼等は寺院において延命や無病のための加持祈祷を行い、また檀家に出かけて経を読むこともあるという [宮坂 1987: 198]。こういった出家をしない一派は、後のマジャパイト時代の『ナーガラクルターガマ (Nāgarakṛtāgama)』 [Pigeaud 1960] の77章では kabajradharan akrama<sup>15)</sup> (妻帯の執金剛派) と呼ばれている。この執金剛派と

は密教徒のことである。<sup>16)</sup> 同じこの章において妻帯である執金剛派の自由免税地の名が上がっているが、その中には10世紀初め東部ジャワにイーシャーナ (Īśāna) 朝を開いたシンドック (Siṇḍok) 王<sup>17)</sup> (在位 929-947) の葬られたとされるイーシャーナ・バジラ (Īśāna Bajra)<sup>18)</sup> の記述がある。

ローカパーラ王とボーディミンバ尊師との関係、即ち国王と密教阿闍梨との関係は、SHK の中にも見い出すことができる。Bali Project の LOr 14749, 14806, 15003 の写本には、「この『聖大乘論』は一切を成就なされた、ワンジャン (Wanjang)<sup>19)</sup> の地の尊師であるサンバラ・スールヤ・ワラナ (Sambara Sūrya Waraṇa) 師が残された教えである。これを仏子であるあなたは免税地ワンジャンを受け継いでゆく者として守っていかなばならない。この免税地ワンジャンは、シュリー・イーシャーナ・バジロートウンガデーワ・ムプ・シンドック (Śrī Īśāna Bajrotunggadewa)<sup>20)</sup> Mpu Siṇḍok) 王が尊師に下賜されたものであり、またそれは聖なる金剛界スプティ・タントラを敬うゆえでもあった」と記されている。

「Īśāna Bajrotunggadewa」は、「Īśāna Bajra-

- 13) サカ暦782年 (860 A.D.) の年号をもつ碑文であるが、N. J. Krom はこれをサカ暦872年 (950 A.D.) と訂正した。しかし、その後 Damais により782年の年号の正当性が指摘されている [Sarkar 1971: 133]。
- 14) 在位856-882の「ワヌア・トゥンガ碑文」中の rakarayan Kayuwangi Pu Lokapāla 王で、シャイレンドラ王家のプラモダワルダニーを妃としたとされるピカタン王の後継者。
- 15) 「akrama」は「順序正しい、適切な」の他「結婚する」の意味をもつ [Mardiarsito 1981: 289; Zoetmulder 1982: 892]。Pigeaud は「akrama」を「結婚する」の洗練された言い回しとしている [Pigeaud 1962: 235]。「krama」は現代ジャワ語に「omah-omah (所帯を持つ、結婚する)」の尊敬語として入っている。執金剛派、即ち密教徒である師が「妻帯」であることは SHKb30 の「師の息子の妻」、b31の「師の奥様」の記述からもうかがわれる。

- 16) 別の一派は「kasogatan kawinaya (仏教の戒律を守る一派)」。これは上座部もしくは顕教の大乗の出家者を指していると思われる。
- 17) 即位名は、シュリー・イーシャーナ・ウィクラマダルモートウンガデーワ (Śrī Īśāna Wikramadharmotunggadewa)。
- 18) この記述は「プチャガン (Pucangan) 碑文」、別名「カルカッタ碑文」 [Yamin 1962, (IV): 191] にある。
- 19) 『ナーガラクルターガマ』78章では、「仏教教団の派生領 (kaboddhāṅśan)」となっている。
- 20) LOr 5129 の写本によれば「bhadrōtunggadewa」である。筆者が参照した Bali Project のものにはこれと同じものではなく、「bajrotunggadewa」となっている。筆者はこれを「bajrotunggadewa」と訂正。

utunggadewa」である。下線部の「Īśāna Bajra (イーシャーナ・バジラ)」は先に述べた様にシンドック王の葬られた土地でもある。この「イーシャーナ・バジラ (梵: ヴァジュラ)」を筆者は密教の灌頂名であると考え。『金剛頂瑜伽中略出念誦經』(以下『略出經』)の巻四に「於弟子本名上。加金剛字」とある様に〔大正蔵 18: 252〕, 密教では灌頂を授ける際に「一金剛 (ヴァジュラ)」という金剛名を与えるのであるが、それがシンドック王の場合「イーシャーナ・ヴァジュラ (バジラ)」であると思われる。13世紀のシンガサリ朝のクルタナガラ (Kĕrtanagara) 王の場合は「シュリー・ジュニャーナ・シヴァ・ヴァジュラ (Śrī Jñāna Śiva Vajra)」である。<sup>21)</sup>

10世紀から13世紀前半のジャワにおいてはシャイレンドラ期のような大型の仏教建築や仏像は残っていない。しかし、本稿の注41)に見られるような10~20センチといった小型の密教尊像はかなり出土している。これらは自己の本尊として厨子などに安置されていたものであろう。仏教はこの時期歴史の表舞台から姿を消してしまうが、13世紀の後半には、シヴァ教と並んで再び国家宗教として返り咲くことになる。

### III ジャワ密教の灌頂次第

灌頂はもともとインドにおいて国王の即位の時に四大海の水を王の頭頂に注ぐという儀式が密教に取り入れられたものであり、密教の教義を師から弟子へ相承するのに欠かせない儀式である。後期密教の灌頂には、瓶、秘密、般若智、第四の4種があるが、『大日経』

や『金剛頂経』では、瓶灌頂のみが説かれている。この瓶灌頂には6種あり、そのうち弟子に阿闍梨位を授けるのが阿闍梨灌頂であり、これには更に、金剛、鈴、印の三種の三昧耶、所器、許可、禁戒、授記、蘇生 (安息) の8つの項目が設けられている〔酒井 1956: 167-172〕。

SHKMの中で説かれる灌頂は「転輪聖王の灌頂」と名付けられているが、SHKMは、その内容から阿闍梨灌頂、即ち伝法灌頂のための儀軌として用いられていたと推定される。『大日経』、『略出經』を参考にその灌頂次第を順を追ってみることにする。『大日経』具縁真言品第二は、弟子をとるに際し「阿闍梨はもし法器としてふさわしく、汚れがなく、心が堅固で信心があり、常に利他を念ずる衆生を見出したならば、自らおもむいて弟子入りを勧めるべきである」と説いている〔大正蔵 18: 4〕。これと同じ内容のものが『略出經』にも見られる〔大正蔵 18: 224〕。SHKMの梵文偈1-9は灌頂をうける弟子にたいする勧発、慰諭である。

弟子は灌頂のため目隠しされて壇場に入る。阿闍梨は10偈の真言を以て弟子に金剛水を飲ませ三昧耶戒を与える。次に阿闍梨は金剛薩埵の印を結んで12偈を説く。<sup>22)</sup> 続いて13偈で弟子の目隠しを解き、14, 15偈で曼荼羅を見せる。このあと灌頂が授与されるのであるが、その時の所作が16-22偈で、16偈は「金籌偈」、17, 18偈は「明鏡偈」、22偈は「法輪・法螺偈」と呼ばれる。26-42偈は灌頂により仏位に進んだ新成の仏達が護持すべき禁戒であるという〔酒井 1950: 46〕。

SHKMの42の梵文偈中、1-9, 16-18, 20-22偈に相当する漢訳が『大日経』の具縁真言品にあることは荻原雲来に〔荻原

21) クルタナガラ王の像とされるジョコ・ドロック (Joko Dolok) 像の刻文〔Yamin 1962, (I): 197〕中に記されている。一方、『ナーガラクルターガマ』43章では「Śrī Jñānabajreśwara」である〔Pigeaud 1960, (I): 32〕。

22) この後弟子は手をひかれ曼荼羅の前に行き花 (鬘) を投げる。いわゆる投華得仏で、その花の落ちたところがその弟子の本尊となる。

表 1 SHKM 梵文偈の項目別分類と出典

1. 弟子の勧発・慰諭	1～5偈	大日経〔大正蔵 18: 4 中〕
	6～9偈	同上〔大正蔵 18: 6 上〕
2. 金剛誓水・三昧耶戒	10偈	<i>Sarvadurgatipariśodhana-tantra</i> （一切悪趣清浄軌） <sup>1)</sup> [Skorupski 1983: 296, ll. 17-18]
3. 警悟（授与金剛・鈴・印契後）	11偈	同上 [ <i>ibid.</i> : 296, ll. 19-20]
4. 召入金剛薩埵	12偈	金剛頂経（不空訳）〔大正蔵 18: 218中〕, 金剛頂経（堀内本） <sup>2)</sup> [堀内 1983, § 224: 125], 略出経〔大正蔵 18: 250上〕
5. 開金剛眼	13偈	金剛頂経（不空訳）〔大正蔵 18: 218中〕, 金剛頂経（堀内本） <sup>3)</sup> [堀内 1983, § 230: 127] <i>Sarvadurgatipariśodhana-tantra</i> （一切悪趣清浄軌）[Skorupski 1983: 150, ll. 11-12, 294, ll. 23-24] <i>Sarvavajrodaya</i> （一切金剛出現）[密教聖典研究会 1987: 249, ll. 13-15]
6. 見曼荼羅	14～15偈	<i>Kriyāsamgrahaṇīkā</i> <sup>4)</sup> [桜井 1988: 17, ll. 16-19]
7. 授与灌頂 a) 洗淨眼	16偈	大日経〔大正蔵 18: 12上〕, 略出経〔大正蔵 18: 252上〕
b) 令弟子対鏡	17～18偈	大日経〔大正蔵 18: 12上〕, 略出経〔大正蔵 18: 252上〕
	19偈	<i>Sarvavajrodaya</i> （一切金剛出現） <sup>5)</sup> [密教聖典研究会 1987: 233, ll. 4-5]
c) 授与商估	20～22偈	大日経〔大正蔵 18: 12上〕, 略出経〔大正蔵 18: 252上～中〕
8. 警悟・慰諭	23～25偈	——
	26～42偈	理趣広経〔大正蔵 8: 812中, 下〕

注 1) (10) idaṃ te nārakam vāri samayātikramād dahet/  
samayābhirakṣāt siddhiḥ siddhaṃ vajrāmṛtodakam//

(11) vajraghaṇṭāṃ ca mudrāṃ ca yady amaṇḍalino vadet/  
hased vāsraddhadānena janasaṃgaṇikāsthitaḥ//

SHK の10, 11偈はこの經典では SHK の12, 13偈に相應するものより後に入っている。

2) (12) ayaṃ tat samayo vajram vajrasatvam iti smṛtam/  
āveśayaty te' dyaīva vajrajñānam anuttaram//

『略出経』中の漢訳は「此是三摩耶金剛。名為金剛薩埵。願入汝身。以為無上金剛智」

3) (13) oṃ vajrasatvaḥ svayaṃ te' dya cakṣūḍghatāna-tat-parah/  
udghātayati sarvākṣo vajracakṣur anuttaram//

表には入っていないが、この他『略出経』には音写と漢訳がある。音写は「～sarvacakṣu vajracakṣu anuttara」で SHKM とは少し異なる。漢訳は「金剛薩埵親自專為汝。開五眼及無上金剛眼」〔大正蔵 18: 251〕。

4) (14) idaṃ hi maṇḍalaṃ paśyaṇ śraddhāṃ janayaṃś cādhunā/  
kule jātāsi buddhānāṃ vidyāmantrair adhiṣṭhitaḥ//

(15) sampado' bhimukhāḥ sarvāḥ siddhiyogatayaś ca te/  
pālayan samayān siddho mantreṣūdyogavāṃ bhava//

5) (19) darpaṇavad vajrasattvas te' ccaḥ śuddho hy anāvilah/  
hṛdaye tiṣṭhate vatsa sarvabuddhādhīpaḥ svayaṃ//



1972: 737-746], また26-42偈は酒井真典(紫朗)により『最上根本大樂金剛不空三昧大教王經』, いわゆる『理趣広經』にあることが指摘されている[酒井 1950: 41]。

これまで未比定であった10-13, 14-15そして19偈について筆者は, 10, 11偈が『*Sarvadurgatipariśodhana-tantra* (一切悪趣清浄軌)』[Skorupski 1983: 296] に, 12偈が梵文『金剛頂經』(堀内本)[堀内 1983: 125], 不空訳『金剛頂經』[大正蔵 18: 218] には音写, 『略出經』[大正蔵 18: 250] に漢訳で, また13偈が『一切悪趣清浄軌』[Skorupski 1983: 150, 294], 『*Sarvavajrodaya* (一切金剛出現)』[密教聖典研究会 1987: 249], 梵文『金剛頂經』(堀内本)[堀内 1983: 127], 更に, 不空訳『金剛頂經』[大正蔵 18: 218 中] には音写で入っており, 14, 15偈が『*Kriyāsamgrahapañjikā*』[桜井 1988: 17], そして19偈に相応するものが『一切金剛出現』[密教聖典研究会 1987: 233] にあることを指摘したい。

表1は *SHKM* の梵文偈を項目別に分類したものである。<sup>23)</sup>

#### IV ジャワ密教の成就法

前章では灌頂次第を見てきたが, 弟子が灌頂を授けられたということは, その者が師により教義を伝授されて正式な阿闍梨となったことを意味する。そして, 第二章でふれた写本に「この『聖大乘論』は一切を成就なされた, ワンジャンの地のサンバラ・スールヤ・ワラナ師が残された教えである」と記されているように, 師が弟子に授けた教義を綴ったものが *SHK* なのである。

*SHK* においては, 先ず六波羅蜜が説かれ

る。六波羅蜜は布施・戒・忍辱・精進・禪定・般若の各波羅蜜で, 各々例をあげ説明を行なっている。「布施」の項では, 「布施には三種あり」と説かれる。普通の布施は財産, 大施は妻子, そして無上施は自分自身を施すことであるという。顕教の經典である『大智度論』には「財宝を以て布施する如きは是を下の布施と名付け, 身を以て布施する, 是を中の布施と名付け, 種々の施において心著せざる, 是を上への布施と為す」と説かれている[大正蔵 25: 92]。 *SHK* は自分自身より妻子を先に施す理由を, 「その愛に引きずられることは仏陀の境地を得るための妨げになる」といっている (b 28)。

次の戒波羅蜜は身・口・意の三業に分けて説かれている。「身」によってなされなければならない善行としては, 仏典でも説かれる「不殺生」「不偷盗」「不邪淫」の三つをあげているが, これに加えてテキストの a 31-b 31 では, 未灌頂の者に頭をさわらせてはいけない,<sup>24)</sup> 灌頂を済ませた後では, チャンダーラの家に入っていくいけない, また, たとえ師の奥様 (*gurupatni*) でも女性にうやうやしく礼をしてはいけないといっている。この「師の奥様」の記述から師は「妻帯」であることがわかるが, これは第一章で述べた「執金剛派」の密教の阿闍梨と思われる。

このあと順を追って各波羅蜜が解説される。続いては「四波羅蜜」であるが, *SHK* にいう「四波羅蜜」は「慈・悲・喜・捨」, 即ち普通「四無量心」と言われているものである。十波羅蜜といえは普通六波羅蜜に方

24) 頭をさわらせてはならない理由をテキストは尊き五如来が身体から消えていってしまうからだといっている。[Hooykaas 1973: 105] によれば毘盧遮那は頭頂(頂髻), 阿闍梨は心臓, 宝生は喉, 阿弥陀は額, 不空成就是頭に住する。ジャワの社会において人の頭をなでたり触ったりするのはタブーである。こんなところにルーツがあるのかも知れない。

23) 項目は国訳一切経密教部1を参考にした[神林 1983: 311-326]。

便・力・願・智を加えたものを指すが、*SHK* は「六波羅蜜」に「四無量心」を加え「十波羅蜜」としている。*SHK* の六波羅蜜と四無量心はどのような意味を持っているのだろうか。

四無量心が密教の観法に取り入れられていることは我が国の『秘蔵記』<sup>25)</sup> から知られる。金剛智訳の『略出経』には六波羅蜜の観法が説かれており、各波羅蜜のそれぞれの真言とその意味、印契、観法の目的を示している〔大正蔵 18: 247〕。*SHK* に六波羅蜜・四無量心が説かれているのは、その儀軌化、つまり観法として取り上げられていたことによるものではなかろうか。*SHK* が六波羅蜜を金剛界自在女 (Bajradhātviśvarī) に、また四無量心をそれぞれ仏眼 (Locanā)、摩摩枳 (Māmaki)、白衣 (Pāṇḍaravāṣiṇī)、多羅 (Tārā) の四女尊にあて、「仏陀の境地を得るため、外面的、内面的に女尊達にお仕えするように」と説いていることから窺えよう。第一章でみたように福智の資糧の無量劫の積集は密教においては「成仏」の絶対条件ではなくなっているのである。

密教は成仏、即ち衆生と「仏」との合一をその目的としている。この「合一」を得るため様々な成就法が説かれてきた。例えば、『大日経』では「五字厳身観」、『金剛頂経』では、「五相成身観」である。後期密教になるとこれが生起次第と究竟次第に二分される。生起次第とは、「仏」を現実世界へ生起させるものであり、究竟次第とは、その「仏」との合一、融合の過程である。

十波羅蜜を説いたあと *SHK* は「偉大な秘密 (mahāguhya)」と「最高の秘密 (Parama-

guhya)」と呼ばれるものを知る必要があると述べている。「偉大な秘密」とは偉大な卓越した力を持っているお方、即ち主 (bharāla) を見出す方法で、それには「瑜伽」「観想」「四聖諦」、「十波羅蜜」を体得する必要があると説く。「観想」と「瑜伽」は次の通りである。「観想」①シャーンティ (寂靜) 観想、「貪」の消滅を想ずる。②ウシュニ (熱) 観想、「瞋」消滅を想ずる。③ウールダ (高揚) 観想、「癡」の消滅を想ずる。④アグラ (最勝) 観想、上記の三つの煩惱の消滅を想ずる。「瑜伽」①ムーラ (根本) 瑜伽、「主 (bharāla)」が虚空にいることを思惟。②マディア (中間) 瑜伽、「主」が体内にいることを思惟。③ワサーナ (停止) 瑜伽、「主」が大地マンドラ<sup>26)</sup> にいることを思惟。④アンタ (終局) 瑜伽、「主」が空性 (śūnyatā) マンドラにいることを思惟。

「偉大な秘密」とはいわゆる「生起次第」にあたるといえよう。それでは「最高の秘密」と呼ばれるものはどのようなものであろうか。それは、「究竟次第」、即ち「仏」との合一であり、「am」<sup>27)</sup> と「ah」の種子真言を伴った入出息定<sup>27)</sup> により達成される。

「am-ah」<sup>28)</sup> と「不二智」は不二なのです。「am」は入息であり、音声でもあります。

それは身体の9つの穴まで広がって満た

26) 大地に作壇された土壇曼荼羅と考えられる。次の「空性マンドラ」は行者の観想の中。尚、観想①のシャーンティ (Śānti) と②のウシュニ (Uṣṇi) は、Bali Project の写本をもとに Kats 本の Śastī, Uṣmi を訂正。

27) 真言を伴った入出息定は『秘密集会タントラ』の究竟次第である『五次第』では金剛念誦と言われるものである。真言には *SHK* と異なる om, ah, hūm, の三種子が用いられている〔酒井 1956: 129〕。

28) 『大日経』の普通真言蔵品第四〔大正蔵 18:16〕においては種子「am (暗)」は成菩提、「ah (噫)」は般涅槃にあてられている。

25) 「四無量心観。与楽を慈となし、抜苦を悲とし不害を喜となし、捨は三事に亘る。然る後、結跏趺座し、端身正念して、支節を動ぜず、目を閉じ、静寂にして四無量心観に入る」〔宮坂 1984: 37〕。

され、身体は太陽のようになるのです。これを「スムルティ・スールヤ」と言います。「ah」は出息で音声でもあります。これが身体からなくなってゆき、消えて身体が月のようになる、つまり最後には澄みきった月のように静寂になるのです。これは「シャーンタ・チャンドラ」または「シャーンタ・スムルティ」とも言われます。「スムルティ・スールヤ」「シャーンタ・チャンドラ」ゆえに不二智が堅固になるのです。

「am-ah」と不二智の合体により「光り輝くもの (diwarūpa)」<sup>29)</sup> が生まれます。それは常に明るく澄みきっており、宝石の輝きのようでもあり、いつも昼間のように明るいのです (a 42)。

「am」と「ah」は不二であり、これは「仏陀世尊 (Bhaṭāra Hyang Buddha)」の父でもあるのです。分別なく無形象を解する智は不二智と呼ばれます。不二智は女尊般若波羅蜜 (Prajñāpāramitā)<sup>30)</sup> で仏陀の母であり、「光り輝くもの」は「仏陀世尊」なのです (b 42)。

古来インドにおいては呼吸の調整が修行の手段として活用されてきた。歴史上の仏陀で

29) インド・チベット密教では「光明」は「一切空」「法身」「涅槃」を表す [酒井 1956: 28]。

30) [Pott 1966: 110] では女尊般若波羅蜜を仏陀世尊の「śakti (明妃)」としているが、原文は「ibu de Bhaṭāra Hyang Buddha (仏陀世尊の母)」となっている。SHK には五如来の明妃は説かれているが仏陀世尊の明妃は記述がない。

SHK 中の五如来の明妃は、毘盧遮那一金剛界自在女、阿闍一仏眼、宝生一摩摩枳、阿弥陀一白衣、不空成就一多羅である。しかし、SHK は「金剛界自在女と仏眼の本質は一つ (同じ)」と但し書きをつけている。『ナーガラクルターガマ』43章には「国王クルタナガラとその妃バジラデーウィーは毘盧遮那と仏眼としてまつられた」との記述がある。チベット密教では毘盧遮那の明妃は仏眼である。

ある釈尊は苦行を離れ菩提樹の下で瞑想し、悟りを開いたのであるが、この時釈尊の行なっていた瞑想は「入出息定」とであると推定され、それは出家後に弟子達、それも最高の弟子達に、最高の教えとして説かれたとも言われている [玉城 1985: 50-51]。

14世紀のマジャパイト時代に書かれた『スタソーマ (Sutasoma)』 [Soewito Santoso 1975] の41章には、SHK と同様の記述が見られるが、「am-ah」の種子真言と入出息定によるこの成就法が、シヴァ教の「六支瑜伽」<sup>31)</sup> に比べてずっと早く悟りの境地が得られるとしている。

## V ジャワ密教の神学

既に見たように「am-ah」の真言を伴った入出息定により、「光り輝くもの」が行者に顕現し、最高原理との合一が達成された。では、この「光り輝くもの」をジャワの阿闍梨はどのように見ていたのであろうか。

それは仏教徒にとっては卓越した神であり、「最高の空」であります。<sup>32)</sup> それは又、パラマシワ (至高のシヴァ, Parama-siwa)<sup>33)</sup> であり、カピラ (Kapila)<sup>34)</sup> の弟子

31) 「六支瑜伽 (ṣaḍāṅgayoga)」は『秘密集会タントラ (Guhyasamāja-tantra)』 [松長 1978] の第18章にも説かれている。

①pratiyāhāra (対応制御), ②dhyana (禅), ③praṇāyāma (調息), ④dhāraṇā (総持), ⑤anusmṛti (随念), ⑥samādhi (定)。「スタソーマ」中のものは⑤が tarka (思忖) となっている。

32) 写本 LOr 14749, 14806 には、この他「Mahā Buddha (大仏陀)」の記述がある。

33) 古ジャワのシヴァ教の教理書『ジュニャーナシッダーンタ』では、ブラフマー、ヴィシュヌ、マハーシュヴァラ、マハーデーヴァ、ルドラ、サダーシヴァ、パラマシヴァが7神 (Saptadevata) としてあげられている [Haryati 7]

にはプルシャ（神我，Puruṣa），カナバクシャ（Kaṇabhakṣa）<sup>35)</sup>の弟子にはアートマ（Ātma）とよばれヴィシュヌ信奉者には「ニルグナ（Nirguṇa）」と呼ばれるものがあります。

無相の阿闍梨には現前の果といわれるもので、これが有相の阿闍梨にとっては三宝尊と五如来尊に変身し、外道の阿闍梨には像とか絵画といったかたちで確立されるのです（b 44）。

「光り輝くもの」は最高原理、即ち「真理」を表しており、「仏陀世尊」も「パラマシワ」も各々それを体しているのである。<sup>36)</sup>各宗教、各学派のたてている最高存在なるものもその本質は同じというのが、ジャワの阿闍梨の見解と言えよう。『スタソーマ』の139章5節には次の様な一節がある。

最勝なる仏陀とシヴァは二つの異なるも

↘ Soebadio 1971: 138]。

34) サーンキア派の開祖。

35) ヴァイシェーシカ派の開祖で、普通、カナダ（Kaṇāda）と呼ばれている。

36) 「仏陀世尊」，「パラマシワ」，「プルシャ」などは各々「真理」を体現。

なお、「アートマ」は最高存在としてのアートマン、即ち最高我，「ニルグナ」はニルグナ・ブラフマン（無属性の梵）を指すと思われる。

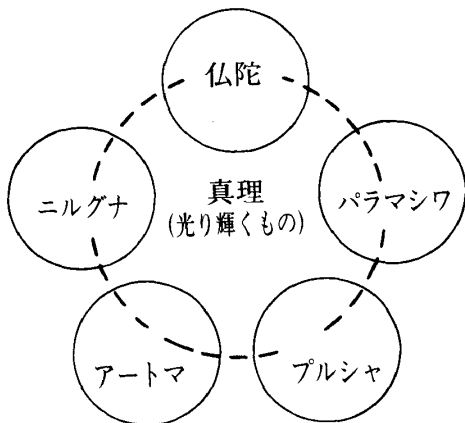


図 1

のと人はいう、

その違い、いかにして見分けられようぞ、  
仏陀の本質、シヴァの本質は一つなり、  
異なれど一つなり、<sup>37)</sup>

二面の真理（ダルマ，dharma）のなきがゆえに。

密教の修法には、自己が本尊であるとする「本尊の瑜伽」がある。先の SHK の b 44 からの引用文中の「無相の阿闍梨」とは無相の本尊、つまり法身を生起できる阿闍梨を指し、「有相の阿闍梨」とは、「三宝尊」とか「五如来尊」といった有相のものしか生起できない阿闍梨で、「本尊の瑜伽」がなく、ただ前方の尊像や絵画といった本尊だけを供養するのが外道の阿闍梨ということになる。「三宝尊」と「五如来尊」については次の様に説かれる。

智には三種あります。それは外面的なもの、有相のもの、そして無相のものです。光り輝くものが仏陀世尊として顕現するのは無相の智ゆえなのです。仏陀世尊が主観的に捉えられ、有相の智によって供養された場合には、吉祥なる「(我) 慢のけがれあるもの」となるのです。そのようなものが本尊に姿をかえた仏陀世尊で、Kṛiḥ 字真言で白い「ドゥワジャ（dhwaja）印の釈迦牟尼尊となります。このお方は「諸尊の師」であると言われています。釈迦牟尼尊の右半身から赤い色をした禅定印の尊が hṛiḥ 字真言から生まれます。これが世自在尊です。釈迦牟尼尊の左半身からは青色の触地印の尊が brīḥ 字真言で生まれます。これを金剛手尊と言います。この三者が三宝尊（bhaṭṭāra ratnatraya）と呼ばれるもの

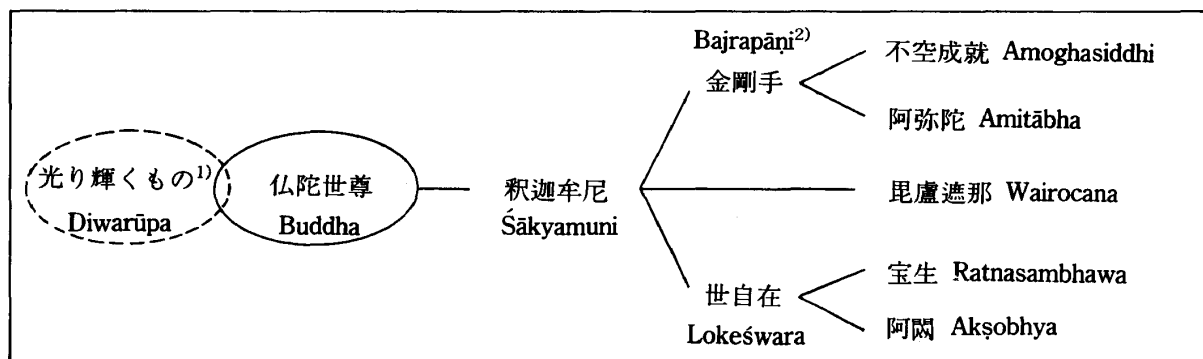
37) この部分の原文は「bhinneka tunggal ika」であり、これはインドネシア共和国の国是「多様性の中の統一」として用いられている。

であり、三宝とは仏・法・僧のことで、身・口・意をその本質としており、慈・福德・帰依を戒として持ち、三界の円満を望んでいるのです。毘盧遮那尊は釈迦牟尼尊の顔から生まれます。世自在尊は自らを二分して、そこから阿闍尊と宝生尊が生まれます。金剛手尊は自らを二分して、そこから阿弥陀尊と不空成就尊が生まれます。これら五者は五如来尊 (pañca tathāgata) と呼ばれ、別の名を一切智尊ともいいます (b 52-b 53)。

本尊の瑜伽には無相と有相がある。これに関して『大日経』は、「本尊の身にまた二種あり、いわゆる清浄と非清浄なり」といっている〔大正蔵 18: 44〕。この部分を『大日経疏』では「有相を以ての故に名付けて非浄となす。(中略) 清浄処に住して寂然として無相なるを名付けて浄となす。(中略) 非浄というは謂形色、印像の類なり」と説明している〔大正蔵 39: 783〕。(我) 慢とは「自己が本尊である」と思うことである。それは言語概念により把握されたものであり、それ

により現れるのは遍計所執性である。ブッダグヒヤの『大日経の要義』によれば、「〈不浄〉とは遍計執した色を本性とする諸の現等覚者の受用身と変化身である」〔高田 1978: 322〕。SHK の三宝尊や五如来尊はこれにあたり、テキスト中、吉祥なる「(我) 慢のけがれあるもの」、即ち「不浄」といわれているのである。

SHK では釈迦牟尼・世自在・金剛手を「三宝尊」としている。上述のブッダグヒヤは『大日経広釈』で「化身を二種と開いて四身とする」と説いている〔酒井 1987: 7〕。二種の化身とは変化身、即ち釈迦牟尼と現等覚身である。そして、この現等覚身を曼荼羅の中尊毘盧遮那としている〔同上書 : 107〕。『ニシュパナヨーガーヴァリー』は「聖なる釈迦獅子世尊は大毘盧遮那にして金色をし、転法輪印をとる」と説く〔氏家 1983: 44〕。これらにもとづけば、SHK にいう「三宝尊」は、『大日経』胎藏界曼荼羅の三部、仏・蓮華・金剛の各部主である毘盧遮那・観音・金剛手にあたるといえよう。一方、SHK の「五如来尊」、即ち毘盧遮那・阿闍・宝生・阿弥陀・



注1) [Stutterheim 1956: 52] では、「Buddha (仏陀世尊) → Diwarūpa (光り輝くもの)」という図式が用いられているが、筆者は「光り輝くもの」と表象されているものは、「真理」であり、それが「仏陀世尊」として顕現していると考えている。

2) 本来ならば蓮華部の世自在は阿弥陀と、金剛部の金剛手は阿闍と組み合わせられなければならない筈である。世自在は観音にあたる。

図2 SHK のジャワ密教パネオン

不空成就の五尊は金剛界曼荼羅の五如来（五仏）である。岩本はジャワでは金剛界、胎蔵界の区別がないとしているが〔岩本 1973: 275〕, 筆者は区別があったものと考えている。それは、古ジャワにおいて胎蔵界曼荼羅の核心と見なされていたのが、*SHK* において仏・法・僧の三宝、身・口・意の三業が宛てられている三部、即ち仏・蓮華・金剛の三部の部主である「三宝尊」だったと考えられるからである。*SHK* で三宝尊から五如来尊を出生させたことは、密教の『大日経』の三部から『金剛頂経』の五部への展開を表していると思われる。そして図2に見るようにこの三部・五部は「仏陀世尊」により統合されている。この「仏陀世尊」は法身仏陀であり、『金剛頂経』の大毘盧遮那、『大日経』の法身毘盧遮那、そしてチベット・ネパール密教で本初仏（Ādi Buddha）と呼ばれているものにあたと考える。

金剛界五如来の印相は、毘盧遮那一智拳、阿闍一触地、宝生一与願、阿弥陀一禪定、不空成就一施無畏である。毘盧遮那を除く四如来の印相は *SHK* のものと同じである。*SHK* では毘盧遮那<sup>38)</sup> と釈迦牟尼の印相を「ドゥワジャ」印としている。「ドゥワジャ」は「幢」である。毘盧遮那や釈迦の印相にはこの名は見当たらない。『金剛頂経』では毘盧遮那、即ち大日如来の印相は智拳（bodhyāgrī）である。前述のように『ニシュパナヨーガーヴァリー』では「大毘盧遮那は、転法輪印をとる」と説かれている。この「転法輪印」はボ

ロブドゥール寺院の円壇上の72体の如来の印相であり、<sup>39)</sup> ムンドゥット寺院の三尊の中尊とも一致する。

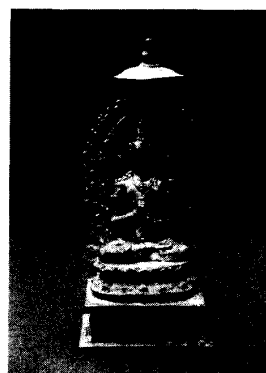
一方、*SHK* の LOr 12923 の写本には「仏陀世尊は五如来になる」とし、その説明の中で「智拳印」の印相を説いている。<sup>40)</sup> マジャパイト時代の『スタソーマ』の32章10節、『アルジュナウィジャヤ（*Arjunawijaya*）』〔Supomo 1977〕の26章4節、『クンジャラカルナ（*Kuñjarakarna*）』〔Teeuw and Robson 1981〕の17章1節にも毘盧遮那の智拳印の記述がある。また、8～9世紀の作とされるジャワ出土の尊像には智拳印<sup>41)</sup> のものがかな

39) インドのスピティ地方のタボ寺には金剛界の立体曼荼羅があり、その中尊である毘盧遮那が転法輪印を結んでいる。タボ寺は11世紀に創建された密教寺院である。この寺の大日堂には金剛界立体曼荼羅の他、ボロブドゥール寺院とおなじく仏伝図と、善財童子の求道を説く華嚴經の入法界品の壁画が見られるのは興味深い。〔氏家 1983〕参照。

40) 智拳印は記されているが尊名がぬけている。しかし、*SHK* が毘盧遮那の智としている「永遠なる智」の記述があるので、智拳印は毘盧遮那尊であることがわかる。

41) ジャワ出土の智拳印の毘盧遮那像。中部ジャワ、ヨグヤカルタ（Yogyakarta）のソノブドヨ博物館所蔵のものである。智拳印の毘盧遮那仏がジャワにもあることは我が国において殆ど知られていない。日本の金剛界大日如来、即ち毘盧遮那は菩薩形であるが、ジャワにおいては如来形の方がはるかに多いのは注目すべきであろう。

38) *SHK* には「毘盧遮那がドゥワジャ印」とはっきりした記述はないが、テキスト a52 には「三宝尊・五如来尊は仏陀世尊の顕現」とした後、白・青・黄・赤・雑色の「色」と、ドゥワジャ、触地・与願・禪定・施無畏の「印相」を説いている。これをもとに筆者は毘盧遮那の印相を「ドゥワジャ」と見なした。〔Hooykaas 1973: 94〕には、「毘盧遮那は白色でドゥワジャ印の如来」の記述がある。



菩薩形10世紀



如来形 8～9 世紀

りみられる。「ドゥワジャ印」は「転法輪」か「智拳」のいずれかだと考えられるが、今のところ決め手となる資料はない。

続いてテキストはヒンドゥー教の三神について次のように述べている。

毘盧遮那の全智の諸々の活動から「イーシュワラ (Īśwara) 神, ブラフマー (Brahmā) 神, そしてヴィシュヌ (Viṣṇu) 神が生まれます。これらの諸神は毘盧遮那尊により三界とその中味を具足させるようにとの命を受けました。その意図するところは、他者の幸せのための努力がなされ、尊者の住するところが常に供養され、動植物などが生まれるようにとのことなのです。イーシュワラ神, ブラフマー神, ヴィシュヌ神の働きにより天上界は神々その他で、地上界は人間などで、そして地下界は龍などで一杯になったのです (b 53)。

SHK ではヒンドゥー教の三神は仏教のパネオンの中に組みこまれ、その中で世界創造の役割を与えられている。毘盧遮那とヒンドゥー教の三神との関係は、8世紀後半の不空の『般若理趣釈』の中にも見い出すことができる。「この三天は仏法中の三宝、三身を表す。(中略) この三者は皆毘盧遮那の心たる菩提心の中より流出す」〔大正蔵 19: 616〕。

第2章で述べた「クルラック碑文」の文面を考え合わせると、このSHKの「毘盧遮那の全智よりヒンドゥー教の三神が出生」の部分は、ジャワに密教が入った8～9世紀当時の考え方を引き継いでいると考えられる。後のマジャパイト時代の『クンジャラカルナ』の23章には阿闍はイーシュワラ (Īśwara), 宝生はブラフマー (Brahmā), 阿弥陀はマハーマラ (Mahāmara), 不空成就是マドゥスーダナ (Madhusūdhana), 毘盧遮那はバター

ラ・グル (Bhaṭṭāra Guru) との記述が見られる。<sup>42)</sup> マドゥスーダナはヴィシュヌ神, バターラ・グルはシヴァ神のことである。この時期ヒンドゥー教の三神はもはや毘盧遮那から出生したものとはみなされておらず、仏教の五仏に対応したシヴァ教の五神が生み出されている。そして五仏の上の「仏陀世尊」に対し、五神には『クンジャラカルナ』や『アルジュナウィジャヤ』では「シヴァ」がたてられているのをみるのである。<sup>43)</sup> この仏教とシヴァ教の最高神は、注36)の図1で示した様にそれぞれの本体となっている、SHKで「光り輝くもの」と表象される最高原理、即ち『スタソーマ』にいう「ダルマ (法・真理)」で統合されていたと考えられる。『ナーガラクルターガマ』の第1章において「Sang Sūkṣmeng tēlēng ing samāḍi (三摩地の深奥の微細なるもの)」、「acintyaning acintya (不可思議なるものの中の不可思議なるもの)」と言われているものも、この「真理」を表わすものであり、それはまた「Śiwaであり、かつ Buddha なるもの」ということで、「Śiwa-Buddha」とも呼ばれているのである。そして、この「真理」は時代が下りマジャパイト後期になると人格化が進み、「サン・ヒアン・タヤ (Sang Hyang Taya)」<sup>44)</sup>あるいは

42) 『アルジュナウィジャヤ』の26～27章では、阿闍ールドラ, 宝生ーダートリ, 阿弥陀ーマハー, 不空成就ーハリ, 毘盧遮那ーシワサダー, となっている。

43) 『クンジャラカルナ』23章, 『アルジュナウィジャヤ』27章参照。五神の上にたつ「シヴァ」が、SHK テキスト b44 の「パラマシワ」、即ち「至高のシヴァ」にあたると思われる。マジャパイト後期とみられる『タントゥ・パンガララン (Tantu Panggëlaran)』では、五神を統率しているのは「バタラ・グル」である [Poerbatjaraka 1964: 55]。

44) 「taya」は「非存在」, 「tunggal」は「唯一」の意。「サン・ヒアン・タヤ」は「コーラワーシュラマ (Korawāsrama)」 [Poerbatjaraka 1964: 55]。

「サン・ヒアン・トゥンガル (Sang Hyang Tunggal)」と呼ばれる尊格が生まれたと筆者は考えている。

## おわりに

密教は、所作・行・瑜伽・無上瑜伽の四つに分類される。無上瑜伽の行法は、行部の『大日経』や瑜伽部の『金剛頂経』にない、タントリズムの影響をうけた性的瑜伽、あるいは生理的行法がとられている。灌頂作法も無上瑜伽部には、秘密灌頂、般若智灌頂といった性的実践を伴うものもある。

ジャワの密教はその初期は瑜伽部の密教であったと考えられるが、時代が下ると無上瑜伽部のものになり、SHKMは無上瑜伽部の灌頂儀軌に属するといわれる〔酒井 1950: 39〕。しかし、これまで見てきたように、SHKMの灌頂次第には、性的儀礼を暗示するものは見当たらない。「真理」との合一を説く記述中 (a 46) に「金剛」と「蓮華」の、即ち男性的要素と女性的要素の、合一を見い出すことができるが、これを以て性的瑜伽が行われていたとは断言しがたい。無上瑜伽部のタントラの中には、呼吸を制御することにより心の統一をし、悟りの境地を得る行法を説いているものも多いといわれる〔頼富 1973: 42〕。古ジャワにおいて密教の他の流派がどのような行法をとっていたかは、教理書など残されていないので明らかではない。しかし、主流となっていたのはSHKに記述のある、種子真言「am-ah」を伴う入出息定であったのではなかろうか。

筆者の今後の課題はシンガサリ・マジャパイト期の密教の解明である。

尚、最後になったが、レフェリーの貴重な

コメント、御教示に対してはこの場をお借りして心から感謝の意を表したい。

## 引用・参考文献

外国語文献

- Haryati Soebadio 1971. *Jñānasiddhānta*. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Hooykaas, C. 1973. *Balinese Baudhdha Brahmanas*. Amsterdam: North-Holland Publishing Company.
- Kats, J. 1910. *Sang Hyang Kamahāyānikan*. 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff.
- Mardiarsito. 1981. *Kamus Jawa Kuna-Indonesia*. Ende-Flores: Nusa Indah.
- Pigeaud, Th. 1960-63. *Java in the 14th Century*. Vol. I-V. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Poerbatjaraka. 1951. *Riwayat Indonesia I*. Djakarta: Jajasan Pembangunan.
- . 1964. *Kapustakan Djawi*. Djakarta: Djambatan.
- Pott, P. H. 1966. *Yoga and Yantra*. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Sarkar, H. B. 1971. *Corpus of the Inscription of Java I*. Calcutta: Firma K. L. Mukhopadhyay.
- Singhal, S. D. 1985. Candi Mendut and the Mahāvairocana-sūtra. In *Bahasa-Sastra-Budaya*, pp. 702-716. Yogyakarta: Gajah Mada University Press.
- Skorupski, T. 1983. *The Sarvadurgatipariśodhana Tantra*. Delhi: Motilal Banarsidass.
- Soewito Santoso. 1975. *Sutasoma: A Study in Javanese Wajrayana*. New Delhi: International Academy of Indian Culture.
- Speyer, J. S. 1913. Ein Altjavanischer Mahāyānistischer Katechismus. *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 67: 347-362.
- Supomo, S. 1977. *Arjunawijaya*. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Stutterheim, W. F. 1956. *Studies in Indonesian Archaeology*. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Teeuw, A.; and Robson, S. O. 1981. *Kuñjarakarna Dharmakathana*. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Wulff, K. 1935. *Sang Hyang Kamahāyānan Mantrānaya*. Det. Kgl. Danske Videnskabernes Selskab., Historisk-filologiske Meddelelser, Vol. 21, pt. 4. Copenhagen: Levin & Munksgaard.
- Yamin, H. M. 1962. *Tatanegara Madjapahit I & IV*. Djakarta: Jajasan Prapantja.
- Zoetmulder, P. J. 1982. *Old Javanese-English Dic-*

↘ 1964: 65] に、「サン・ヒアン・トゥンガル」は『スダマラ (Sudamala)』等にてでくる〔ibid.: 75〕。



tionary. The Hague: Martinus Nijhoff.

日本語文献

- ハイネマン, R. 1985. 『漢梵・梵漢グラニ用語用句辞典』東京: 名著普及会.
- 堀内寛仁. 1983. 『梵蔵漢対照初会金剛頂経の研究』梵本校訂篇 (上). 高野: 高野山大学密教文化研究所.
- 石井和子. 1987. 「古ジャワの密教教理書『サン・ヒアン・カマハーヤーニカン』について」東京外国語大学論集37: 263-281.
- \_\_\_\_\_. 1988a. 「古ジャワ『サン・ヒアン・カマハーヤーニカン・マントラナヤ (聖真言道大乘)』」東京外国語大学論集 38: 289-301.
- \_\_\_\_\_. 1988b. 「古ジャワ『サン・ヒアン・カマハーヤーニカン (聖大乘論)』全訳」『伊東定典先生・渋谷元則先生古希記念論集』, 57-99ページ所収. 東京外国語大学インドネシア・マレーシア語学科研究室.
- 岩本 裕. 1973. 「インドネシアの仏教」『アジア仏教史インド編VI 東南アジアの仏教』岩本裕 (編). 東京: 佼成出版社.
- \_\_\_\_\_. 1977. 「南海の密教——『聖大乘真言理趣論』——」『講座密教』2, 77-94ページ所収. 東京: 春秋社.
- 神林隆浄 (訳). 1983. 『国訳一切経』密教部I. 東京: 大東出版社.
- 松長有慶. 1978. 『秘密集会タントラ校訂梵本』大阪: 東方出版.
- \_\_\_\_\_. 1980. 『密教経典成立史論』京都: 法蔵館.
- 宮坂宥勝 (編). 1983. 『弘法大師空海全集』第3巻. 東京: 筑摩書房.
- \_\_\_\_\_. (編). 1984. 『弘法大師空海全集』第4巻. 東京: 筑摩書房.

- \_\_\_\_\_. (編). 1987. 『密教小辞典』東京: 春秋社.
- 密教聖典研究会. 1987. 「Sarvavajrodaya——梵文テキストと和訳 (II)」『大正大学総合佛教研究所年報』(9): 222-294
- 荻原雲来. 1972. 「爪哇に於て発見せられたる密教要文」『荻原雲来文集』, 737-746ページ所収. 東京: 山喜坊佛書林.
- 酒井真典 (紫朗). 1950. 「ジャバ発見密教要文の一節に就いて」『密教文化』(高野山大学密教研究会) (8): 38-46.
- \_\_\_\_\_. 1956. 『チベット密教教理の研究』東京: 国書刊行会.
- \_\_\_\_\_. 1987. 『大日経広釈全訳』酒井真典著作集第2巻. 京都: 法蔵館.
- 桜井宗信. 1988. 「Kriyāsaṃgrahapañjikā の灌頂論 (1)——瓶灌頂の梵文テキスト及び考察——」『智山学報』37.
- 佐和隆研 (編). 1975. 『密教辞典』京都: 法蔵館.
- 高田仁覚. 1978. 『インド・チベット真言密教の研究』高野: 密教学術振興会.
- 玉城康四郎. 1985. 『原始仏教』(仏教の思想1) 京都: 法蔵館.
- 梅尾祥雲. 1982. 『理趣経の研究』梅尾祥雲全集V. 京都: 臨川書店.
- ウェーバー, M. 1983. 『ヒンドゥー教と仏教』深沢宏 (訳). 東京: 日貿出版社. [原著. Weber, Max. *Hinduismus und Buddhismus*. Tübingen: J. C. B. Mohr. (Paul Siebeck). 1920 (1978)]
- 氏家覚勝. 1983. 「タボ寺大日堂の仏像構成と問題点」第四回高野山大学チベット文化調査団報告書.
- 頼富本宏. 1973. 「ある金剛乗文献の紹介——Vyakṭabhāvānugatatattvasiddhi について——」『密教学研究』5.